

日本キリスト教団藤沢教会 2023年7月2日

マタイによる福音書 18:1-9

おはようございます。この日もいつもと同じように主の御前に集められた私たちですが、ところで、この一週間、巷の喧噪にあって私たちがしたことはなんであったのか、それは、神様に心を開き、祈ることです。そして、私たちのその祈りは、自分の思いだけを神様にぶつけるものではなく、徹頭徹尾甦りのイエス様の声を聞くものであります。それは、このイエス様の声を聞くことの許されている場所に今こうして生きているのが私たちだからです。それが前日も申し上げた恵みの場ということでもあります。ですから、十字架を前にしてイエス様が弟子たちに「私の名によって何かを願うならば、私が叶えてあげよう」と告げたのはそれゆえのことでもありました。そして、それは、弟子たちに対してだけでなく、私たちについても同じです。なぜなら、そこで思い出して欲しいのですが、私たちの祈りの最後に必ず口にする言葉は何なのでしょう。それは、「主の名によって」ということです。主とはつまり、十字架と復活のイエス様のことでもあります。ただ、そのイエス様がここで弟子たちに向かって、「なんでも叶えてあげよう」と語るわけではありません。けれども、語られている中心的な事柄は、私たちが同じように恵みの場に生きているということなのです。

弟子たちがイエス様に向かって「一体誰が、天の国で一番偉いのでしょうか」と尋ねているのは、彼らがイエス様から十字架と復活の出来事を聞いたからです。ですから、「誰が天の国で一番偉いのか」との問いかけは、そう意味で弟子たちがイエス様のお言葉を彼らなりにしっかり理解したからでもありました。しかし、弟子たちのその問いかけは、十字架というその重さと比べるといささか緊張感に欠けた感があります。それは、私たちの目からすると、弟子たちのその態度がとても無邪気なものにも映るからです。従って、私たちであれば、恐らくは、ここであっけらかんとイエス様に対し、自分の気持ちを詳らかにすることも無いのでしょうか。ところが、イエス様の弟子たちは違った、しかも、弟子たちのこの無邪気さをイエス様は一向に気にされる様子もなく、むしろ、不躰とも言える

この発言をしっかりと受け止めておられるご様子でもあるのです。それは、「イエス様が私たちと共にいます」という、この恩恵の場に生かされているのがまさに弟子たちであるからです。まただから、弟子たちも、手放しで、あっけらかんと、まるで子どものように、思ったことを思ったままに口に出しているのです。そして、それは、弟子たちには、自分が何者であり、どこに生きているかをがはっきりと分かっていたからです。そして、それがイエス様の愛を知るということであり、また、それが平安に与るということでもあります。それゆえ、この日の御言葉の中に自分自身の姿を見出している私たちもまた、この時の弟子たちと同じように、無邪気さをもって手放しでイエス様に聞いていかなければなりません。けれども、そう言われ、直ちに「はい、分かりました」とばかりにいかない、それが私たちでもあるのです。

神様の独り子であるイエス様と共にあることが許されている、この恵みの場に生かされているのが私たちであります。けれども、それを知らながらも弟子たちのようにはできない、それはどうしてなのでしょう。それは、何かが邪魔をするからです。そして、その何かとは、私たちの自信のなさであったり、力不足であったり、気持ちの弱さであったりと、それこそ、理由を上げれば、きりがなくいくらいに、自分のダメなところ、足りないところがいくらでも出てくるからです。私たちがイエス様を前にした時、堂々と胸を張って、自分を出せないのはそのためです。また、だから、イエス様に何でも言ってお覧、と言われても、いえ、特に何もありません、と遠慮してしまうのです。ですから、ここでの弟子たちの無邪気さは、私たちからしたら羨ましい限りです。私たちがやりたくてもやれないことであり、それゆえ、この弟子たちの姿に倣うこと、この時の弟子たちのようになること、それが恩恵の場に生きる私たち信仰者の一番の願いということにもなるのでしょうか。ところが、無邪気な願いを投げかけるこの弟子たちに向かって、イエス様のなさったことは、彼らの求めるその答えに答えることではなく、一人の子どもを彼らの前に立たせることであります。

そこでその光景を思い描いていただきたいのですが、それは、その子をぐるっと取り囲むように、弟子たちが輪になっている光景です。そして、この輪の中に私たちもいるのですが、それをこの時の私たちに置き換えるなら、それは、ちょうどこの聖餐卓の前にイエス様がその子を立たせたということでもあるのでしょうか。そして、その上でイエス様は「はっきり言うておく。心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」と仰ったのですが、これはどういうことなのでしょう。無邪気に喜び、心の内側をあけすけにする弟子たちに向かって、さらには、無邪気な弟子たちのその姿を手本にしたいと思うその私たちに、イエス様は「子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」と仰るのです。このことはつまり、無邪気だけでは天の国に入ることはできない、イエス様はそう弟子たち、私たちに仰ったということです。ならば、その願いを果たすためにはどうすればいいのか、そこで、イエス様が次に仰ったことは、「自分を低くして、この子どものようになる人が天の国で一番偉いのだ」というこのお言葉であったのです。

そこで私たちは、この「自分を低くして」と仰るこの言葉から何を思うのでしょうか。恐らくは、思い上がる弟子たちを諷めようとして、イエス様はそのようなことを仰っていると考えるのではないのでしょうか。それは、御言葉が謙虚さということを度々語るように、謙遜こそが私たちクリスチャンの美德でもあるからです。しかし、それは、もちろんそれはそうなのですが、けれども、イエス様がここでこのようなことを仰るのは、彼らの思い違いを正すことだけを目指してはいないからです。同時に、彼らの無邪気さをも生かそうとしてのことであり、むしろ彼らのこの良さをもっと伸ばそうとさえしている、それが私たちの目の前にあるイエス様であるのです。それは、彼らの問いかけに対しては、率直に、そして、誠実に答えておられることから分かります。ただし、その答えは彼らの願った通りのものではありませんでした。子どもが、どうすればお医者さんに、ケーキ屋さんに、宇宙飛行士になれるかと尋ねた時に、大人である私たちの答えは、夢を諦めずに持ち続ければ必ず夢は叶うということでもあるのでしょうか。つまり、自分の力を高め、磨いていく必要がある、だから頑張っってねということです。そして、

イエス様に対する弟子たちの無邪気さは、高みを目指し、夢を実現したいと思う、そういう素朴な願望に満ちあふれたものでもありました。それは、イエス様に対する彼らのその思いがそれだけ深かったからでもあります。つまり、イエス様のようにになりたい、@偉いぞ、よく頑張ったねとイエス様に言ってもらいたい、私たちが「子どものように」というこの言葉からイメージする、まさにそのままの姿がこの時の弟子たちであったのです。

けれども、イエス様のその答えは彼らからすれば、まったくトンチンカンで、意味不明なものでもありました。けれども、イエス様がここでこのようなことを仰っているのは、彼らのダメなところを矯正したいからではありません。そのいいところをもっと伸ばそうとしてのことであり、ですから、冒頭のイエス様の言葉の中には、前段のペトロに対するものと同じように、弟子たちの無邪気さに対するイエス様の笑い声が聞こえてくるようにも思うのです。それは、話をはぐらかさず、また頭ごなしに叱らずに、弟子たちの話をちゃんと聞いて、それが弟子たちには分からなかったとしても、彼らの願いに真っ正面から答えようとしている、それがイエス様であるからです。そして、イエス様の「心を入れ替えてこの子どものようになる」というこの言葉がまさにその点を言い表しているとも言えるのですが、けれども、その言葉が弟子たちの心にどこまでしっかり届いたのかは分かりません。それは、その答えは弟子たちの誰もが望んだ高みを目指すことではなく、低く低くあること、しかも、それが、心を入れ替えなければ分からないものだとしたら、なおのこと、すぐに分かるものではないからです。そして、それについては、イエス様にもよく分かっていることでもありました。しかし、その彼らのことを大らかに受け止めておられるのがイエス様でもあるのです。

なのに私たちは、「自分を低くし」というこの言葉を道徳的な意味での謙虚さと理解してしまう。それは、また別の意味で弟子たちと同じだからです。つまり、低くあろうとすることが私たちの徳を高めることにつながると、そんな風に考えているから、いや、考える以前に物事のすべてを高く、大きくしなければならぬ、成長しなければいけないと、そういう考えが私たちに染みついているからです。従って、腕前を競い合うように「誰が一番か」と無邪気

に競い合う弟子たちと私たちは同じです。それは、謙虚さを求め、徳を積もう、積みなればと、そう思っているからです。ですから、イエス様は「低くある」ことを求めているのは弟子たちだけでなく、イエス様を前にしていい子でいなければと思う私たちも同じです。しかし、イエス様が求めておられることは、天の御国という高みに向かってステップを刻み、高度を上げていくことではありません。心を入れ替えて、この子、つまり、弟子たち、私たちの目の前にある一人の子どもになること、そのことだけを私たちに求めているからです。

イエス様が弟子たちの目の前に置かれた子どもは、弟子たちにとっては見たことも聞いたこともない、はじめて見る子どもでありました。そして、「その子どものようになれ」とイエス様は仰ったのですが、それゆえ、「この子のように」と言われ、それが分からないのは当然です。しかし、この分からないもの、想像もつかないものを受け入れられなければ、その願いが叶えられることもない。なぜなら、「私の名のためにこのような一人の子どもを受けいる者は、私を受け入れるのである」とイエス様がこう仰っているからです。しかも、その上でイエス様の仰ったことは、「私を信じるこれらの小さな者の一人を躓かせるものは、大きな石臼を首にかけられて、深い海に沈められる方がましである」との大変厳しい言葉であったわけですから、なおのことだとも思うのです。これを聞いて、皆さんはこの御言葉をどのように受け止められたのでしょうか。

私の場合で申しますと、イエス様のこのお言葉の中にあるのは自分自身の姿です。それは、何かをやらかしてしまった者の末路というものを思うからです。ただ、悲惨なのはそれを避ける方法がないように思えることです。それは、イエス様が「世は人を躓かせるから不幸だ。躓きは避けられない。だが、躓きをもたらず者は不幸である」とこう仰っているからです。ですから、もしこの悲惨な末路を避けようとするなら、私たちは神様の造られたこの世界から出て行くか、あるいは、神様と対峙し、神様に打ち勝つしか他に助かる道はないということにもなるのでしょうか。私が首から石臼を提げている姿を想像してしまうのはそれゆえのことでもあります。しかし、御言葉が神を愛し、隣人を愛せと言っている以上、それを避け、誤魔化しながら生き

るだけでは、私たちはキリストの命に生きていたとは言えません。けれども、愛という言葉をもって私たちが行うことのかなりの部分が人を傷つけ、また躓かせるものであることを考えれば、私たちが愛そう愛そうとすることは、あるいは、愛ある者となろうとすることは、かえってその傷口を広げることにもなるのでしょうか。

一体、イエス様は私たちに何をおっしゃりたいのでしょうか。私たちだけでなく、弟子たちもまた、同じようにその頭の中は混乱したに違いありません。それは、イエス様の厳しさに触れたからではなく、その誠実で大らかな姿に反して、伝えられたその内容が私たちの目からすると真逆の印象を与えるものだからです。ですから、そういう意味で弟子たち、私たちとイエス様とは、見ている方向がまったく逆です。それゆえ、コミュニケーションが成り立つこともありません。ちぐはぐさを通り越して、一緒にいることの意味すらも分からなくさせるのです。では、イエス様はその私たちのことを見放しているのか、相手にもしていないのか、イエス様のその笑い声がそうではないことを私たちに明らかにするのですが、そこで心に止めたいのは、イエス様が「心を入れ替えて」と仰っているこの言葉です。それは、私たちがイエス様の仰ることがわけ分からなくなっているのは、心を入れ替えると仰っているこの言葉を誤解しているからです。

「心を入れ替えて」ということの意味は、罪深い自分を反省し、頭を丸めて一から出直すということではありません。物事の見方を180度方向を変えるということであって、心の中をまっさらの状態に初期化するということではないからです。ただ、方向を変えろと言われても、私たちの目には、その耳には、その鼻、口、肌、皮膚には、神様とイエス様の情報だけが伝わるわけではありません。正しいことや間違っていることも含めて、いろいろな情報、刺激が伝わってくるのです。ですから、神様とイエス様のことをまっすぐに見たいと思っても、いつの間にか分からなくなってしまう。絶対に間違っていない、自分は正しいと信じ、行動した結果、人を傷つけ、躓かせてしまう、それは、自分でも気がつかないうちに、神様以外の別の何かに心が支配されてしまっているからです。そして、それは、信仰が篤いか薄いのか、大きいのか小さいか、長いのか短いのか、大きいのか小さいか、私たちが図りうるいかなる力、基準

をもってしても克服することはできません。なぜなら、こうしてこの世に生きているのが私たちであるからです。まただから、私たちは、意図せず何かをやらかしてしまう、特に、自分は正しいと思い込んでいる時にこそ、絶対にやってはいけないことをしてしまうことがあるのです。イエス様が躓かせてはならない、躓きは避けられないと仰るのは、そのような救いようもない現実に私たちが生きているからでもあります。けれども、この現実を救いようもないと思っているのは私たちであってイエス様ではありません。なぜなら、その私たちに向けられているものがイエス様の笑い声であり、その笑顔であるからです。

ですから、イエス様が私たちに求めることは、その笑顔を見つめ、その笑い声を聞くことでもあるのでしょうか。そして、イエス様が一人の子どもを私たちの目の前に置かれたのは、それを私たちに知らしめるためでもありました。それは、この子どもこそが私たち一人一人であり、それもただそこにいること、あること、私たちに求められていることは、ここにいる、ここにあり、そのことだけであるからです。それゆえ、私たちは何者かにならなければならないわけではありません。すでにイエス様によって愛されている、この平安の中にその命を生きていることが許されている、それが私たちであるからです。では、それは具体的にはどういうことなのでしょう、そこで、ある一人の子どもを私たちの前に置いて、最後にそれを皆さんにお伝えしたいと思います。

幼稚園の子ども、保護者と親しく交わっていると、イエス様の仰りたいことが「なるほどそうか」と思われることが度々あります。つい最近もある保護者から次のような話を聞きました。その方にはお子さんが二人いるのですが、あるとき、弟の大きな鳴き声の下から聞こえてきたのだそうです。そこでその方はお兄ちゃんが何かをやらかしたと思い、これはと思ったのそうなのですが、それは、大きくなるにつけて良いことだけでなく、悪いことも覚えるようになってきたからです。そして、下に降りると弟が泣きながら兄が蹴ったと訴えているのです。それでこれはいけない、人を蹴ったらどれだけ痛い、体で覚えさせなければとそう思い、思いっきりお兄ちゃんのお尻を蹴ったところ、その様子を見た弟が叫んだのです。「蹴ったのはおもちゃだ一」と、つまり、蹴ったのは弟ではなく、

弟が遊んでいたおもちゃだったということです。そこでその方ははっと気づいたのです。自分が子どもたちにやってはいけないと言っていることをやってしまった。ただ、後の祭りです。もちろん、そこで謝りました。でも、謝っても、やってしまったことを取り消すことはできません。それゆえ、親と子の関係にヒビが入ったとしても不思議ではありません。すると、蹴られたお兄ちゃんがこう言ったのだそうです。「誰にでも間違いはあるよ」と。そして、そのお兄ちゃんがそう言えたのは、また、弟が正直に「違う」と言えたのは、その方が普段から本当に子どもたちのことを大切に大切にしていたからです。そして、それは、傍らで見ているだけの私にもよく分かることです。だから、お兄ちゃんは、たとえ親がしくじったとしても、信頼を失わず、赦すことができたのです。そして、それが「いる」ということ、「ある」ということでもあるのですが、つまりは、イエス様に招かれ、こうして恵みの場にある私たちの関係性とはそういうものだという事です。なぜなら、後日その子にあった時、「赦すことを誰に教えてもらったの」と聞いたところ、その子が言ったことは、「牧師一」というこの一言だったからです。

ただ自慢話をしたいわけではありません。誰がどうのこうのというそういうつまらない話をしたいわけではなく、今私たちがこうして置かれている場所は、このように何かになろう、何かをしようと思わなくても、そこにイエス様の笑い声、笑顔が満ちあふれている限り、イエス様の愛と赦し、満ちあふれている平安な場所なのです。私たちが人を赦し、愛し、信頼することができるのはそれゆえのことです。また、それだけではありません。それが壊れそうになった時にも、私たちが赦しと愛を経験しているから、その壊れかけた関係性を新たに築き直すこともできるのです。そのことを私たちは、私たちの目の前にいる、この交わりの真ん中にある子どもから教えられているのであり、それは、私たちもその一人一人でもあるからです。幼子のように、神様の子どもとして、こうして今共にあり、これからも共にあり続けることが許されている、だから、このことに心から喜ぶことのできる、それが私たちであり、そこに目を向けよと、イエス様はこう私たちに語りかけておられるのです。祈りましょう。